

内閣総理大臣賞を受賞された 生産者を訪ねて

(公財)日本豆類協会

熊本県熊本市の農事組合法人秋津宮農組合は、昭和62年に大豆、水稲、麦の収穫受託生産組織として「秋津宮農組合」が設立され、平成25年に地域の全農家参加型の「農事組合法人秋津宮農組合」となりました。令和5年時点で組合員は142戸、約150haの経営面積で、大豆、水稲、小麦のブロックローテーションによる作付けを実施し、組合として防除と収穫作業を担っておられます。

第52回全国豆類経営改善共励会（主催：全国農業協同組合中央会、株式会社JA新聞連）では、多面積栽培の労力分散のため、主力品種の「フクユタカ」に早生の「すずおとめ」を組み合わせることにより、播種と収穫時期の分散を図っていること、堆肥施用に努め、暗渠逆流（後述）によるかん水を実施し生育後期の干ばつ軽減に留意していることなどが評価され、大豆・集団の部において農林水産大臣賞を受賞されました。

さらに、第63回農林水産祭（主催：公益財団法人日本農林漁業振興会）では、農産・蚕糸部門において内閣総理大臣賞を受賞されました。

日本豆類協会では、令和7年1月30日に上田徳行^{のりゆき}代表理事組合長を訪ねて、直接いろいろなお話を伺いましたので、ここではその時のインタビューの様子を報告します。

上田さんには小麦「ミナミノカオリ」の追肥作業とスイカの定植作業などのほ場の管理作業にお忙しいなかにもかかわらず、お時間を割いていただき貴重なお話を伺うことができました。また、熊本県県央広域本部農林部参事の藤本仁寿様及び九州農政局生産部の皆様には日程の調整あるいは当日の対応にご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

JA熊本市湖東支店の会議室にて、上田さんが配ってくださったペットボトルの玉緑茶「森のくまさん」を飲みながらお話を伺いました。



JA会議室にて上田さんを囲んで(左から、上田さん、藤本さん、農政局の方々)

最初に、昨年（令和6年）11月23日に明治神宮会館で行われた農林水産祭式典では、河添衆孝^{かわぞえくにたか}副組合長と木原俊博副組合長のおふたりが壇上に上がられた様子を振り返りました。上田さんは、共励会の表彰式では自分が壇上に上がらせてもらったことから、農林水産祭では次の世代への期待を込めて、経験を積むことが必ず肥やしになると考え、副組合長のおふたりに壇上に上がってもらい自分は観客席から見守ることとしたと話されました。そして、自分は観客席に座ったことで緊張することがなかったからか、これまでの経緯が走馬灯のようによみがえり感極まる思いであったとのこと。



大豆畑にて(右から、上田さん、河添さん、木原さん) ※藤本様より提供

上田さんのお話で特に印象的だったのは、収量を確保することへの強い思いです。しっかり穫れないことには喜びもわからない、いかに収量を上げて収入を確保していくかということでした。

このために、がんばって7月中旬までに播種して単収200キログラム以上を穫ること、それこそが仕事と思い定めているとのこと。

この地域の令和6年産の大豆は不作でした。これは、7月16日の降雨後、8月中旬まで雨が全く降らなかったため、7月中下旬に播種しても発芽不良となり発芽しなかったことが大きな要因と考えられています。そうした厳しい気象条件のなかでも、上田さんは7月18日には播種を行い、その後は、暗渠逆流（仮設の堰で排水路の水位を上昇させること）によるかん水を行うことにより、一定の収量を確保することができたそうです。パイプ配水による畝



暗渠逆流灌溉1



暗渠逆流灌溉2

間かん水には莫大なコストがかかる一方で、この暗渠逆流は、完全なブロックローテーションにより作付けほ場が集約されている状況があり、加えて、本暗渠を活用できるというほ場条件を生かしたものです。

組合の所在する秋津地区は、平成28年4月に発生した熊本地震の震源地から極めて近く、ほぼ全域で農地や農業用施設等に甚大な被害を受けました。組合では水稲作付けは不可と判断し、営農継続のため関係機関一体となり大豆へ全面切り替えしたほか、「秋津地区未来創造プロジェクト」を立ち上げ、県と市と連携し、営農への影響が最小限となるよう工事計画を組むとともに、大区画化等を含めた創造的復興を実施されました。

令和2年から水稲の作付けが順次再開された一方で、大豆と小麦の作付けが4年間繰り返されたことや、客土等の実施により地力が低下しました。このため、土壌分析結果を基にした施肥設計や堆肥センターと連携した堆肥投入により生産性の向上を図っているとのこと。

また、実需者の要望に応えるマインドも印象に残っています。地元実需者からの「地場の大豆を使用した納豆を給食に提供したい」という要望を受け、平成13年から納豆用品種「すずおとめ」を作付けておられます。また、近隣の小学校へ大豆生産者として授業に参加し、花壇での大豆栽培や伝統的な脱穀、選別作業等の実演を行っておられます。



食農教育(小学校の花壇で大豆栽培)

※秋津営農組合様より提供

今後は、生産性向上が期待できる新品種への転換、堆肥センターや地域外の畜産農家との連携関係を構築して、堆肥投入による地力の維持向上に取り組んでいきたいとのこと。

その後、営農組合の施設があってほ場が見渡せる場所に移動しました。ほ場では一面、鳥害対策の真っ黒な吹き流しと、小麦「ミナミノカオリ」を見ることができました。上田さんは、遠く三方の山並みを指しながら、気象をどう読んでいるかや、熊本地震で断層がどのように走ったかなどをお話してくださいました。そして、組合の前身の組織が設立された昭和61年からオペレータとしてこの地域のほ場を担当してきたので、どこのほ場はどのような土壌かなど把握できているとお話になりました。

また、倉庫にはたくさんの農業機械が整備されていました。たくさんの農機があったので思わず「上田さんにとって一番愛着のあるのはどれですか？」と尋ねたところ、即答で「これだ！シンプルなのが一番」と教えていただきました。



ほ場風景(熊本地震では左側に断層が走った)



農業機械の保管庫



上田さんが最も愛着をもつコンバイン(平成10年度導入)



カントリーをバックにほ場に立つ上田さん、遠く山を望む

最後に、抱負をお伺いしたところ、熊本地震からの復旧復興には全国から多くの支援をいただいた、それを忘れないよう、「かけた情けは水に流し、受けた恩は石に刻め」という言葉を座右の銘として自分の励みにしているとお話になりました。

(参考)

第52回令和5年度全国豆類経営改善共励会成績概要(2024年6月14日 全国農業協同組合中央会、株式会社JA新聞連)

令和6年度(第63回)農林水産祭「栄えの受賞に輝く」(令和6年11月 公益財団法人日本農林漁業振興会)